

京都府中部，三峠断層系の活動履歴調査

Paleoseismological study of the Mitoke fault system, Kyoto Pref., Japan

吉岡 敏和 [1], 吾妻 崇 [2], 下川 浩一 [3], 細矢 卓志 [4], 渡辺 俊一 [4], 山口 弘志 [4]

Toshikazu Yoshioka [1], Takashi Azuma [2], Koichi Shimokawa [3], Takashi Hosoya [4], Shunichi Watanabe [5], Hiroshi Yamaguchi [5]

[1] 地調・地震地質部, [2] 地質調査所・地震地質・活断層, [3] 地調・地震地質・活断層研, [4] 中開

[1] Earthquake Res. Dept., Geological Survey, Japan, [2] Active Fault Research Sec., Eq Research Dep., Geological Survey of Japan, [3] Active Fault Research Sect., Earthquake Research Dept., GSJ, [4] Chukai, [5] Cyukai

三峠断層系は，京都府の中部，丹波高地の内部を西北西－東南東方向に延びる左横ずれ活断層系である．この断層系の活動性および活動履歴を把握するため，三峠断層系三峠断層の1カ所，同殿田断層上の2カ所でトレンチ掘削等の調査を実施した．調査の結果，三峠断層では少なくとも約1700年前以降，殿田断層では約3000年前以降の活動がなかったものと考えられ，具体的な活動時期や活動間隔についての情報は得られなかった．

三峠断層系は，京都府の中部，丹波高地の内部を西北西－東南東方向に延びる左横ずれ活断層系である．地質調査所では，三峠断層系の活動性および活動履歴を把握するため，トレンチ掘削等の調査を実施した．

三峠断層でのトレンチ調査は，京都府船井郡瑞穂町質美のといし山南麓において実施した．トレンチは地形から推定された断層線を横切る小河谷に沿って掘削した．トレンチの壁面には，基盤岩である丹波帯堆積岩類の破碎帯，それを不整合に覆う斜面堆積物，および小河谷に沿って堆積した礫層が露出した．破碎帯中には厚さ数cmの軟弱な粘土を伴う，ほぼ垂直な面を持つ断層が数本認められたが，これらは小河谷沿いの礫層（約1700-2500年前）には変位を与えていなかった．なお，トレンチの約50m南には，段丘堆積物を切る逆断層露頭があり，段丘堆積物の基底面高度と段丘面高度ともにおよそ7mの上下変位が認められた．この逆断層とトレンチに現れた断層との関係は不明である．

殿田断層では，船井郡日吉町志和賀東組地区と同八栄地区においてトレンチを掘削した．東組地区のトレンチは，断層に沿って並ぶ小盆地の出口に位置し，壁面には基盤岩の破碎帯とそれを覆う礫層が露出した．破碎帯は，トレンチの中央北よりが最も破碎度が高く，この部分が最近活動しているものと考えられる．基盤岩の上面には約1.5mの南落ちの段差が見られたが，段差に接する礫層には明瞭な引きずり構造等は見られず，段差の方向はこの付近の断層の走向（ほぼ東西）に対して斜交する．したがって，この段差は侵食によって形成された可能性が高く，段差そのものが断層変位を示す可能性は低いものと考えられる．トレンチに露出したすべての部分について，段差を覆って堆積した礫層（約3000年前）には変位は見られなかった．一方，八栄地区のトレンチは，断層が通過すると予想された鞍部斜面を掘削した．壁面には鞍部を埋積した細粒の堆積物と角礫からなる斜面堆積物がほぼ垂直に接するのが観察されたが，断層は確認されなかった．

今回の調査の結果から，三峠断層系の活動履歴について，三峠断層では少なくとも約1700年前以降，殿田断層では約3000年前以降の活動がなかったものと考えられる．しかし，今回の調査では，具体的な活動時期や活動間隔についての情報は得られなかった．殿田断層では，今回のトレンチ地点の約5km東方において，1997年にトレンチ調査が実施されており（植村ほか，1997），最新活動時期が1930-2310BP（AD85-BC385）にあったとの結果が得られている．この結果と今回の調査結果に関して，最新活動時期に差異があるのか否かについては，年代測定上の問題を含めて，さらに検討が必要である．